地域の活動から学ぶ



福祉施設における市民発電所の展開/ 千葉県松戸市・柏市

福祉施設に着目する 4 つの理由

千葉県北西部に位置する柏市、松 戸市。それぞれ50万人近い人口を 抱え、住民の数も増加し続けている この地域で、いわゆる"都市部"地 域における脱炭素に取り組むのが、 一般社団法人銀座環境会議である。 同団体は、「都市生活者のライフス タイルを変革する | ことで持続可能 な社会を目指すことを掲げ、2019 年に設立された。代表の平野将人氏 は、松戸市が開催する気候市民会議 「松戸市環境未来会議 | のアドバイ ザーや、"省エネお助け隊"の千葉 県窓口を務めるなど、地域脱炭素に 向けた様々な取組を推進している。 屋根置きの太陽光発電を都市生活者 が実践できる変革と捉えてその普及 に取り組んでいるが、とりわけ福祉 施設における市民発電所の展開はユニークな取組と言えるだろう。

福祉施設を対象とする理由として、 平野氏は「安定性」「経済性」「福祉性」「必要性」の4点を挙げる。「安定性」とは、その土地での事業の継続性である。太陽光発電設置における投資回収期間を仮に10~15年程度とした場合、一般の商業施設では「今の時代、ここで10年商売を続けられるか分からない」ため、二の足を踏んでしまうことがある。一方福祉施設は、その特性上むやみに閉鎖や移転はせず、その場所で事業を続けていくという思いが運営者も利用者も強い傾向にある。

2つ目の「経済性」は、資金調達 の幅広さである。一般の商業施設等 で企業が太陽光発電を設置する場合、 自己資金や、汎用性の高い補助金を 活用することになるだろう。一方、 福祉施設は、寄付や福祉を対象とす る補助金の活用が可能な場合もある。

理由の3つ目「福祉性」と4つ目 「必要性」は特に強調したい点だ。 現代社会において、電気へのアクセ スは基本的人権の1つである。電気 代の高騰により福祉施設の経営に影 響が出ることは、単に一事業の継続 性という問題ではなく、施設利用者 の人権への影響もはらんでおり、エ ネルギー貧困という不条理は避けな ければならないと考える。また、災 害時にエネルギーは誰にとっても必 要だが、福祉施設を利用されている 障害者や高齢者は停電の影響を特に 受けやすい。仮に医療機器が停電で 使えなくなった場合、命の危険につ ながる可能性は容易に想像がつく。



市民発電所「柏そらぴか発電所第1号」の仕組み



ザザビー・ドゥ屋上で市民発電所完成を喜ぶ利用者と市民の皆さん



非常時に迷わず使えるように、使用できる コンセントの位置を掲示

最大の特徴は「市民発電所」 としての運営

上記を背景に、同団体ではこれまで、千葉県松戸市に2ヶ所、同柏市に2ヶ所の福祉施設に太陽光発電を設置してきた。その最大の特徴は「市民発電所」として運営していることである。一般に、コミュニティや市民により再生可能エネルギーへの出資を受けたエネルギー生産者が「市民発電所」と呼ばれるが、同団体では、①資金調達に市民が参加する②(可能ならば)施工に市民が参加する③停電時には近隣の充電ステーションとなることを「市民発電所」の条件としている。

例えば、社会福祉法人彩会が運営する生活介護事業所ザザビー・ドゥに、2022年に設置した「柏そらぴか発電所第1号」では、地域住民が「パネルオーナー」として参加をしている。銀座環境会議が太陽光発電パネルをパネルオーナーに販売し、オーナーからパネルを借りて発電事業を行うというスキームである。結果として、クラウドファンディングでは77名の市民が参加し、40枚すべてのパネルにオーナーが付いた。また、施工はもちろん専門業者が行

うが、釘打ちなど子どもでも出来る 作業に市民が参加する機会を作った。 そして設置後は、平時に施設として の自家消費を超える余剰分を電力会 社に売電し、災害等の停電時には充 電ステーションとして地域に開くこ とにしている。

福祉施設側の目線

これら市民発電所の取組を、福祉 施設側はどのようにとらえているだ ろうか。社会福祉法人彩会ザザビー・ ドゥ所長の川名早苗氏にお伺いした。 施設の移転を検討していた時、かつ てたびたび水害に見舞われた経験か ら防災については強く意識していた こと、地域に開かれた施設を作りた いと考えていたことなどから、太陽 光発電設備は是非設置したいと考え ていた。一方、初期投資の壁も高く 悩んでいたところ、「銀座環境会議 が松戸市の教会に市民発電所を設置 した」という新聞記事を読み、「自己 資金ゼロ、充電ステーションとして 市民に開放」という言葉に強く惹か れ、翌朝には平野氏に連絡していた。 そこから、前述の「柏そらぴか発電 所第1号」設置に動き出した。「何

かがあった時に、地域の皆さんに還元できる施設になれるということで、障害者施設という機能を超えて地域の皆さんが足を運んでくれる施設になりたい」と川名氏は話す。

その後、市民発電所は、グループ ホームや自立支援ホームなど他の施 設へも広がりを見せている。銀座環 境会議では、補助金の活用や企業の 寄付キャンペーンを組み合わせた資 金調達、施設の特性に応じた蓄電池 の設置など、現場のニーズに対応し たスキームづくりをサポートしてい る。平野氏には印象に残っている場 面がある。自立援助ホームで暮らす 子どもたちは親と一緒に住むことが 出来ない複雑な事情を持つ場合が多 く、例えば取材が来てもあまり出た がらない傾向がある。しかし、「柏 そらぴか発電所第2号 | について取 材された際、写真を撮ってもよいと 言ってくれて、施設の方も驚いてい た。この設置には、寄付を通じて、 全国のたくさんの方が自分たちのこ とを気にかけてくれている、協力し てくれたんだということを、子ども たちも感じているからではないだろ うか。